2022年度
理事長・園長　研修会

2022年11月28日(月)　オンライン開催

日本カトリック幼保連盟主催

「カトリック園の使命」（『ともに歩む御大切』）

「青少年を愛するだけでは足りません。青少年が愛されていると感じられるように彼らと共に生きる」（ドン・ボスコの言葉）

カトリック大阪大司教区大司教・枢機卿　前田万葉

始めに…

「カトリック幼保勤労感謝の日」

- 日ごろの幼保教育への勤労を労い、感謝と御礼句といたします。

主の祈り

天におられるわたしたちの父よ、
み名が聖とされますように。
み国が来ますように。
みこころが天に行われるとおり地にも行われますように。
わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。
わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします。
わたしたちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。アーメン。

1．カトリック園は天の国

神の国、キリストの国、愛の国。

聖書　マタイ19･13～15

- 「そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。」

- ①　よく教会のミサなどで子どもたちの泣き声やおしゃべりに対して賛否両論がある。
(主任司祭は説教ではなく、人柄である。＝福音宣教的に。)

- ②　「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。わたしの名のために、このような一人の子供を受け入れる人は、わたしを受け入れるのである。」（マタイ18・3～5）

（理事長・園長はもちろん、教職員も子供のように）

幼子とともに歩むや待降節

- 昨日から待降節が始まり典礼暦の新年にも入り、さらに新しいミサの式文が使用されることになりました。幼子のような気持ちで素直に待降節を歩み始めましょう。
- 「シノドス」（ともに歩む教会・園～交わり、参加、そして宣教）と関連して、「幼子に並び従ふクリスマス」＝幼子キリストに、そして園児たちに教えられる。
- 「毎日がサンタクロースクリスマス」の教育環境を作り上げてまいりましょう。

- さて、日本のキリスト教は少数派ですが、カトリック幼保・学校、施設は大きな影響を与えています。
- 事実フランシスコ教皇も2019年11月23日来日早々の、日本司教団に向かって、「信頼を得ている教会の教育の使徒職は、福音宣教の有効な手段であり、・・・」（教皇フランシスコ訪日講話集１４～15ページ参考）とおっしゃいました。
- このことは、教皇様はじめ、福音宣教省長官・ルイス・アントニオ・ゴキム・タグレ枢機卿もはっきりとおっしゃっています。（私は貧しい人たちから学んだ・インタビュー本・日本語訳）

- 今年１０月にタイ・バンコクで行われたFABC（アジア司教協議会）５０周年総会でも、ほとんどの国が少数派にもかかわらず学校教育では多大な貢献をしている報告がなされました。
- 事実、わたしも立場上、キリスト教以外の人たちと関わり合うことが増えてきましたが、「わたしはミッションスクール出身です」とか。「わたしはカトリックの幼稚園を出ました」とか、随分耳にいたします。びっくりするぐらいです。

- 福岡教区報の「時の話題」欄で、「修道生活の喜び～奉献生活の日に～」（2022・2・7）という記事が出ていました。読んでみます。
- 実に確かな効果が実っているのです。これからも使命感を持って幼保教育（福音宣教）にご協力をお願いいたします。

時の話題

修道生活の喜び
～奉献生活の日に～

「あ！神さまだ！！！」と男の子に声をかけられた。それは、東京の新川沿いを散歩している時のことだった。「神様ではなくシスターですよ」と答えると、いきなり、3人の男の子の中の一人が「イエスさまはね、十字架に掛けられて死んだけど、三日目に復活したんだよ」と言った。「へーどこで教えてもらったの？」「カトリック幼稚園」「どこの？」「北九州のカトリック幼稚園」「僕、主の祈りも知ってるよ」と彼は祈り始めた。

話を聴くと、現在小学五年生で、一年生の時東京に越してきたとのこと。五年前に教わったことをしっかり覚えていた。今まで、出会った子どもたちはみんな、クリスマスについて話をしてくれたがこの子は主の復活について話してくれた。勿論、クリスマスも覚えていて、自分は三人の博士を演じたとも言う。幼児教育の大切さを、しばしばこのように感じることがある。成人したらカトリック教会に行くと約束して別れた。

私たちの修道会は2022年で日本における宣教活動は70周年を迎える。中国から追放されたイタリア人のシスターたちは故深堀仙右衛門司教様のお招きで福岡の美野島で幼稚園を始めた。日本語の分からないシスターたちは大変な苦労をしながら教育事業を始めた。そしていまがある。神さまの計らいで大切な幼児教育を続けてこられたことに深く感謝している。

毎年、幼稚園では聖劇をしている。幼い子どもたちの心の中にイエス・キリストをしっかり焼き付けて…。成長した卒園生にいろんなところで出会うとき、誇らしく思い、喜びで満たされ、自然に微笑みがわくこの頃だ。

聖心のウルスラ宣教女修道会
Sr.植木聆子（れいこ）

「神様が居ると知らされ行き帰り　聖堂（みどう）の前は敬礼通過」

- 私は今、73歳9か月近くなりますが、約70年前長崎県南松浦郡新上五島町仲知青空保育園の園児でした。毎日自宅から保育園までの通園で決して忘れられないことが今でも鮮明です。
- 途中に教会があり、教会の前を通るときには必ず「最敬礼」をしてから通ります。これは、保育園の先生（姉さん＝修道女）たちの厳しい躾でした。「教会には神様が居る」ことを身をもって教えられたのです。わたしの人生の基礎をしっかりと定めていただいたような気がいたします。
- 他にも、「十字を切り、天にまします…、めでたし…」など。

- FABC総会でのカトリック教育総論も、「特に、人権・尊厳・平和を育成するためカトリック教育の役割が重大。そして，大変評価されている。これからはますますシノドス的新しい歩みを。」とのこと。
- カトリック教育機関同士や同じ教育機関内での足並みがそろわないではかえって躓きになる。
- ともに歩む同士であり、特に同園の教職員、保護者、園児、そして地域や教会との「ともに歩む＝シノドス」的姿勢こそが福音宣教であると意見が大勢であった。

2. カトリック園の本質は「愛」＝「御大切」＝「仕合わせ」

「大切にし合う、生かし合う、仕え合う、愛し合う」＝仕合わせ

- みなさん、カトリック幼保教育ですから、遠慮せずに神の「愛」について話してください。イエス・キリストやマリア様の名前も出してください。
- 特に幼保教職員は、それを知らないと本当のキリスト教の教育者ではないと思います。カトリック園の子どもたちや関係者に影響を与えるためには、自分自身がキリストの「愛」をまず知ることです。
- そして、その「愛」に生きるように努力する者でなければならないと思います。園長や理事長として教職員に遠慮してはいけないと思います。参考のために、わたしなりのキリストの愛を分かち合ってみます。

①　「愛」について

- ヨハネの第一の手紙に『愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです』（Ⅰヨハネ４の7～8）とあります。
- この度は、特に幼保教育ですから、その神の「愛」をクリスマスから知ることにいたしましょう。

- クリスマスの馬小屋風景（馬小屋宣教）に、キリスト教のすべてが凝縮されていると言っても過言ではないくらいです。
- 「父は、御独り子を遣わすほど、この世を愛された、大切にされた」のです。その御独り子キリストは、神でありながら神であることに固執しようとせずに人間となられて、しかも十字架の死に至るまで、御自分を人類のために与え尽くされました。これも、パウロのフィリピ人への手紙２・6～8にあります。
- 普通は「自分は神様だ！」という感じになるはずです。ところが、人間となって同じ苦しみ、悲しみ、喜びを共にするために、人間の苦しみに寄り添うためにわざわざ人間にまでなって下さった。それがクリスマスなのです。神様の「愛」なのです。

- マタイ福音書20・28に、『人の子が来たのは、仕えられるためでなく仕えるために』という言葉があります。
- それは、イエス・キリストご自身が言った言葉です。神の子でありながら、わざわざ自分を人の子と言っているのです。ということは、人間と同じような苦しみや悲しみも共にする、人間と寄り添う、一緒になるという思いやりがそこに込められているわけです。
- そして、遜り（へりくだり）も込められています。神様が人間を自分に仕えさせるために、人間世界の中に降りてきたのなら分かるけれど、そうではなく、神様なのにわざわざ人間世界に降りてきて、その人間に自分が仕える。こういうありがたいことがあるでしょうか。それが神様なのです。

- だから、そういう神様を知る人は、本当の「愛」を知ることができる。ただ自分の満足のために相手を欲しいというのは「愛」ではない。「愛」というのは、自分が犠牲になっても相手を生かしたいと思うこと。神様の「愛」はそれだったのです。だから、『愛は神から出、愛する者は神を知っている。愛さない者は、神を知らない。神は愛だからです』という言葉がよく分かります。

- クリスマスの馬小屋の風景というものも、わざわざ神の子が、どうして貧しい汚い動物小屋の餌桶の中に生まれてきたのか。
  - 「飼い葉桶餌と成りしか神の御子」
- 世の中にはたくさんの人たちがおり、本当に助けを必要としている人がいる。聖書の中に『最も小さなものの一人にしてくれたことは、私にしてくれたことである』（マタイ25・40）という言葉もあります。馬小屋の風景の中にそのことも込められているのです。
- その後、イエスは難民生活もします。命を狙われて、エジプトに避難してきます。そういう避難民、難民生活の人たちのことも考えて助けてあげて下さい、ということもメッセージとして込められているわけです。

② インマヌエル体験

- マタイ福音書1・23に「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は、『神は我々と共におられる。』という意味である。」とあります。
- 「神が私たちと共にいて下さること」。これ以上に大きな喜びはないはずです。何でもお出来になる。何でも自分のことを大切にしてくれる。そんな神様が一緒にいて下さるのだから、これ以上の平和、喜びはないでしょう。例えば、子どもにとって、お父さんお母さんが一緒にいて下さると安心感があります。

- 私も子どもの頃、経験があります。
- 私は小学校六年を卒業して、中学１年から親元を離れて八時間船に乗って長崎まで、木の葉のように波に揺られながら、船酔いして生きるか死ぬかのような感じで長崎に行ったり来たりしておりました。
- でも、休みが来るのが楽しみで、「親と一緒に生活できる」という楽しみがあったのです。それを知っているからこそ、辛い寮生活みたいな神学校で、本当に厳しい環境の中だったけれども耐えることができました。
- そして、どんなに船が揺れても、それを苦しみとも感じないくらい、家に帰れば幸せな家族の雰囲気を味わえました。

- ところが、休みが終わって戻る時の苦しみが何とも言えない。本当に海に飛び込もうと思うくらい苦しい時もありました。「また、神学校に戻るのか」と。
- でも、それも次の休みがあるからこそ、また神学校に行くことができ、神学校での苦労も乗り越えることができたのです。
- 特に、３月生まれですから、12歳になったばかりです。親元を離れて、朝５時半に起きて、どんなに雪が降ろうと外に出て体操をしなくてはいけない。起きるのが非常に辛かった。そういうことから始まり、一日のプログラムが決まっていました。
- ですから、そういう経験の中から、中学生時代までは特に親が共にいるという幸せを噛み締めていました。だからこそ、神様が共にいて下さるという喜び、クリスマスの本当の喜びというものを身に染みて感じることができます。

③「仕合わせ」について

- 「仕え合う」ことを「仕合わせ」と言います。
- 日本古来の「しあわせ」観だそうです。相手に「仕える」ということは、相手を「大切にする」こと、相手を「生かす」ことなのです。
- それは正にキリストが言う「愛」です。天の父が実行し、そして生まれてきたキリストが実行したのは、この与える「愛」、仕える「愛」、生かす「愛」、大切にする「愛」なのです。

- 最後の晩餐の席上で、イエス・キリストは突然立ち上がって、たらいに水を汲んできて、タオルを腰に巻いて、ペトロから始まり弟子たちの足を一人ひとり丁寧に洗い始めるのです。
- ペトロは、「先生がそんなことをしてはいけない」と言って断るのですが、「私があなたにこうしなかったら、私とあなたの関係がなくなってしまう」と。そして、全部丁寧に12人の弟子たちの足を洗い上げて、最後に「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。」（ヨハネ13・14）と言いました。

- そして、結論的に言った言葉が、「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。」（ヨハネ１５・11～12）です。まさに「仕え合い愛し合う仕合わせ」を説いたのです。

- 私は小教区、教会で26歳から57歳まで31年間働きました。恐らく何百組結婚式を司式したと思います。必ず、私はそのカップルのためにもちろん祈りますが、「仕え合って仕合わせに」を自分が確信してからは、このことを言わなかったことはありません。
- 私と一緒に結婚式に奉仕してくれるオルガニストや聖歌隊は、「また仕え合って仕合わせに、と言っている」と思うかもしれない。それでも私は「仕え合って仕合わせに」と言う。つまり、妻は夫に仕え、夫も妻に仕えるようにと。

- 世の中もみんなが相手を生かし、相手を大切にし、それも妻と夫の間で、そして子どもたち・家庭の間で、もちろん親戚・地域・社会・その国、そして全世界でこれができれば、本当の平和が、本当のクリスマスがその時に完成するということができます。
- 「そんなの夢物語だ、聞きたくない」と思う人がいるかもしれないけれど、それを信じるということが大切なのです。
- 例えば、「世界平和は絶対に訪れない。何をしても無駄だ」と言う。では、「何もしないのか？」と言いたいです。しかし、信じて、一生懸命何かをやっていこうとすることが大切だと思うのです。

- 自分ができないことでも、とにかく信じて、そしてそれをできるまでやるという生き方が大切です。多くのスポーツの選手はそれで成功しているのです。あるいは、その方法でプロとしての力を発揮しているのです。
- だから、信じる人っていうのが、いかに偉大か。そして、「必ずできないことはないはずだ」ということです。
- 神様を信じるものとして、神にできないことはない。マリア様がまさにそうですね。「自分には考えられないことを神様は私にされました」と。「神様にできないことは何もない」という天使の言葉に、マリア様は「おことば通りこの身になりますように」と本当に素直に受け入れて、そのことをいつも思い巡らしながら、救い主の母として一生を送っていくのです。

終わりに

「感謝こそ力と救い去年今年」

- 神様がこれほど私たちを大切にして下さった。
この大切にして下さった神様にいつも感謝して生活を送ることが生きる力になるし、
それが救いへとつながっていくということです。
- この証しが、カトリック園の大切な使命であり、これこそが、カトリック園の発展につながり、福音宣教になるのです。

- 「カトリック園は、福音宣教の大切な場であり、使命です。
- 教会には来なくても園や学校には沢山の方々が関係者としてかかわってきます。少数派の日本カトリック教会にとっての大切な宣教の場です。
- カトリック園は、理事長、園長、職員、園児、保護者、卒園者、地域社会、教区、小教区、諸カトリック施設が一緒になって、もちろん主任司祭も司教も一緒になって、仕え合い、大切にし合うときに、はじめてその機能が活動が大きなものになります。カトリック園の発展になり、宣教の実りになるのです。

- ヨハネ１７・２１に、「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。」とあります。

- 最期に誤解がないように言いたいです。
- ①誰も完全な人はいないのです。
  でも日々努力していることに価値があります。
- ②話し上手も必要です。
  しかし、それ以上に必要なのは人柄です。
  「みことば」に生かされた日々の努力こそ園の発展と福音宣教なのです。
- 第16回シノドスの過程で見えてきたのは、
  「教会も学校（園）も「話上手」ではなく、
  人柄（ともに歩む）だ。」ということです。

「カトリック新春希望シノダリティ」

- 励ましの句を贈ります。
- 2025年の聖年も「希望の旅＝ともに歩む希望の旅」と決まったようです。
- まさに教会は「シノダリティ」です。幼保連盟もともに歩みましょう。

- それでは神様の恵みとマリア様の導きがありますようにと、お祈りを込めて終わりたいと思います。

アヴァ・マリアの祈り

アヴェ、マリア、恵みに満ちた方、
主はあなたとともにおられます。
あなたは女のうちで祝福され、
ご胎内の御子イエスも祝福されています。
神の母聖マリア、
わたしたち罪びとのために、
今も、死を迎える時も、お祈りください。
アーメン。

ご静聴ありがとうございました。